



至福

—
現代げんだい小人伝しょうじんでん

書野綾子

毎日新聞社

至福——現代小人伝
げんだいしょうじんでん

定価はカバーと帯に表示してあります

一九七五年六月二五日 印刷
一九七五年六月二五日 発行

著者 曾野綾子

編集人 桑原隆次郎

発行人 伊奈一男

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市名东区堀内町

印刷 中央精版
製本 大口製本

まえがき

世に英雄・偉人の伝記はあれども、凡人・けちな人間の記録はきわめて少ない。私にはそれが不思議でならない。既に四分の一世紀前のこととはなったが、第二次世界大戦を現実にしたのは誰であつたか。べた金の階級章をつけた將軍たちではないのだ。実際に戦つたのは庶民であつた。

死にたくなくても、脱走したくても、その勇氣もなかった庶民なのだ。私は、それらの人々の前に頭をさげよう。そして名も知らぬ野草をその墓前に捧げよう。

記録されねばならぬのは、本当はそれらの人々の生涯である。ことに作家として、私は歴史に名を残さなかった人々を描かねばならないと思う。もちろん私は、事実そのままを書くのではない。私が書き残そうとしているのは、彼らの外見ではなくて、心だけである。

おろかしく、けちくさいことばかり考えている我らの仲間。表立っては歴史の流れを変えるような何の働きも、しそうにない人々。しかし地球はまさに彼らの自然さと善良さと謙虚さによって、ここ迄支えられて来たのだ。

目次

第一話	花と実	7
第二話	歴史の塊	29
第三話	あの男なら	49
第四話	栄光をたたえる	69
第五話	ひょうたん風邪	86
第六話	銀の花	107
第七話	寿賀子と和子	124
第八話	サラダの夜	148
第九話	飲びの秋	169
第十話	至福	198

装
幀
原
弘

至福

— 現代小人伝

第一話 花と実

小説家の世界について、私が世間一般から受ける質問は次のようなものである。

夜と昼といつ書くのか。

原稿料はいくら貰えるのか。ことに本の印税はいくら来るのか。

作品の質はどうやって保証するのか。

小説をいわゆるビジネスとして考えると、当然問題になるものである。あらゆる商行為はまず質、数量、単価、納品の時期、支払いの時期、などが、結果的には守られないことはあっても、一応決まっているものだからである。それが小説書きの社会では一切不明なのである。まず質の保証が一切ない。当人は決断していい加減に書いたつもりはなくても、駄作の生まれる可能性は大いにある。いや可能性などという程度ではない。一編の佳作のかけには、十編の駄作が死屍累々と残るのである。十編の駄作を避けて、一編の佳作だけを得るために、作品の量を十一分の一にすればいいかという決断は、うではない。ぼうだいな土砂に混って磨けばなんとかなる貴石がほんの僅か産出されると、一脈似たところがある。

さて原稿料は駄作にも佳作にも同じように支払われるのである。値段の違いは作品の質にはよらず、

その出版社のその作家に対する評価にかかっている。もっともこの値段すら文書によって契約をかわして決められるのではない。あそこ会社なら、だいたいいくらぐらいの原稿料をいつごろ払ってくれるだろう、という漠然としたあてがあるだけである。

ベストセラー作家がいくら儲けたか、ということを計算するのはいともた易い。通常定価の一割がその人の税込みの印税である。だから千円の定価の本がかりに百万部売れたとするとその儲けは税込み一億である。もっともベストセラーの数というものは多くの場合かけ値がしてある。例えば、三十五万八千部売っている本は、往々にして、四十五万部突破などと書かれる。たった一回だけ、自分の本がベストセラーになった時、私は、このやり方がいやでたまらなかった。三十五万八千部売っているなら、三十五万部突破と書けばいいのである。仕方がないから、私は会うほどの人に数を訂正して歩いた。「誇大広告というものですよ。あれは」と私は渋い顔をした。すると、出版社から、やんわりとたしなめられた。

「あれは、それだけ売れる予定とお思い下さればよろしいのでして」

このような実務の世界ばかりでなく、一般の人たちに案外知られていないのが、編集者と小説書きの間柄である。多くの場合、この両者は長い関係で、一つの作品を完成する上で両輪の役目を果たす。小説は根気のいる仕事である、調査に数年、書くのに数年。本にするのに数カ月。この間、たいていの作家はなまけ、調子が悪くなり、時には、理由もなく「俺の才能は枯渇した」などと思ったりするのである。才能などというものは初めからそれほどあるわけではないから、一夜のうちに「枯渇する」、

などという高級な変化があるわけではない。作品を完成するのに必要なものは世間では一般に芸術的才能だと考えられているが、私から見ると、作家としての最大の条件は体力である。四百字づめ原稿用紙の枡目をうめる作業は、煉瓦^{れんが}づみの職人の労働とほぼ同質である。

話は横にそれてしまったが、小説書きが自信を失ったり、なまけたりするのを子供をあやすようにして、引きずってくれるのが編集者というものである。よく作家が後書きの中で、その本ができるまでに世話になった系の編集者に対して礼を述べているのは、決して社交辞令ではない。あれは心からの感謝の表われなのである。面と向っては礼を言にくいこともあるので、後書きの中に書いておくというあたりが本音かも知れない。

このような編集者と、作者との関係を頭に入れておいた上で、この物語をお読み下さると、有り難いと思う。

小説家・垂水朝一郎について書くのに、私は、あまり適当な人間ではない。彼と私は、遠い姻戚^{いんせき}関係になるのだが、それだけに妙に癒着したような心理状態になってしまって、他の友人の作家の作品を読むように彼の書くものを味わう気になれない。私は、六十を過ぎて、まだ生きていて、何もすることがなくなったら、垂水朝一郎の作品を隅から隅まで読むつもりなのだが、これは決して嘘ではない。まだ小説を書き初めのころ、私は、垂水とあまり親しくなかった。年も十歳ぐらい年上だったし、法事の席などで会うにしては姻戚としても遠すぎたし、彼自身も、そのような親戚づきあいに面倒の

いい方ではなかった。何よりもまして、その頃彼は東京の東の端に、私は西の端に住んでいた。それがある年突然、彼が私のうちとほど遠からぬ場所にマンションを買って移って来たのである。家が近くなったせいも、間もなくW誌では、垂水朝一郎と私の係の人として、脇村耕三を指定してきた。それ以来、私はおかしな形で、垂水の生活を知ることになったのである。

「垂水先生とはお従兄さんだそうですね」

或る日、脇村さんが私に言った。

「従兄じゃありませんよ。甥の奥さんの姉の旦那さんの叔母さんが垂水さんの奥さんなんです」

「なるほど」

垂水朝一郎は未開人のようなところがあり、従兄から先の人間関係になると、もう混乱をきたして、わからなくなっているに違いなかった。

「とにかく垂水先生には弱ります」

脇村さんは言った。

「どういう風に困るんですか？」

「何よりもメ切りを守ってくれないんです」

垂水朝一郎がどの程度の流行作家だと言うべきか、私にはわからない。彼は、何本もの連載をかかえて、一日に何十枚も書くというような作家でないことだけは確かである。彼は、時たま純文学雑誌と言われている真面目でこむずかしくて原稿料の安い雑誌にも書くし、二月に一度ぐらいは、中間雑

誌と呼ばれている原稿料の高い雑誌にも顔を出している、食えないことはないが、メ切りに追われて原稿が間に合わないほどたくさん書いているとは思えない。

「そういえば、昨日、垂水のうちから電話がありました」

私は脇村さんに言った。

「今日は何を書いているんだ、と聞くもんですから、丁度脇村さんの雑誌の仕事を終ったところで、明日、脇村さんが取りに来てくれるはずですよ、と言ったら、へエ、もう書き終えたのか、脇村のところの小説ならまだ一週間は遅くとも大丈夫だ、と教えてくれました」

「ジョ、冗談じゃありませんよ。もう一週間遅かったら、印刷所で書くかたはしから原稿を入れてもらわなきゃおさまりませんよ。あの人は実際困るんです。世間のことはうといのに、メ切り日ばかり精通してるんですから。それですよ。自分だけが知っててぎりぎりに書くんならまだしも、何も知らないよその人にまで、そうやってメ切りを遅らすように示唆するんですから」

脇村青年は、心底怒ったように言った。

「従兄にあたる方のことを悪く言っちゃ申し訳ありませんが」

脇村さんは腹立ちまぎれに垂水と同じように不正確なことを言った。

「いえ、一向におかまいなく」

「垂水さんはですね。ちっともメ切りを守らないで、それで嘘八百、理由を並べたてるんで有名なんですよ。それが又、実にへたくそな言い訳でしてね」

「へたって、どんな嘘つくんです？」

「前の晩下痢したから書けなかったって言うんですよ。それでいて僕が行ったら、枝豆でビール飲んでます。僕が『下痢はどうしました？』って言ったら『何の下痢だ』ってあの人はもう今しがたついた嘘を忘れてるんですよ。しかし、あの雑な頭の割にしちゃあの人の作品は悪くないですね。僕は好きだ」

私は時々思うのだが、編集者というものは、作家と作品に惚れなければいけないのである。中には、俺は眼があるのだ、とばかり、批判者になりたがる編集者もないではないが、長い眼で見た場合、そのようなタイプの編集者は決して本当の意味で作家を育てない。編集者が完全に作家の保護者的立場になるのは、ことに、その作家がスランプに陥った時で、その時に変らざる勵ましと、支持を与えうるかどうか、その編集者の人間の厚みを示すものでもある。

その意味で脇村耕三は、まだ二十代の半ばという年にしては、早くも編集者として大物になりうる素質を充分に持つてはいたが、世間並みの眼でみると、彼もまた、あまり常識的な人物とは言いかけた。

或る日私が、垂水のうちにいると、電話が鳴った。垂水家は、垂水夫人のナホと、娘の敦子の三人であるが、ナホ夫人は、リユーマチでこれでもう十年近く寝たきりであった。敦子は女子大を出て、器量も十人並み以上なのに二十八歳になってまだ嫁に行かないでいるのは、母親がわりの主婦業をぬけられないからだとも考えられていた。そんなうちへ、私が遊びに行っていて、敦子が買物にでも出

ていれば自然私が電話に出る羽目になるのである。

「ええと、ええと」

私は相手の声だけで、脇村さんだとわかったが、わざと、知らん顔をしていた。

「ええと、私は今、どなたの所にかけたんでしょうか」

脇村さんは言った。

「私のところです。曾野綾子です」

私はわざと言った。

「ああ、そうでした。どうも、どうも」

脇村さんはそこまで言ってから、

「あれ、どうもおかしいな」

と独り言を言っている。

「私は、本当にお宅におかけしたんでしょうか」

「えへへ」

私はおもわず笑い出した。

「そうだと思います。僕は今、垂水先生のところへおかけしているんです。どうも失礼しました、かけ直します」

「いいんですよ。ここは垂水のうちなんです」

私は気の毒になって慌てて言った。

「そうですね。つながりましたか、いやこの頃の電話は実によくできています」

「今、当家の主はお手洗いに入っておりますが、何か申し伝えましょうか」

私は尋ねた。

「恐れ入ります。実は今日、垂水先生のお原稿をいただく日なのですが、もうおできになっているでしょう」

「ああ、それでしたら、さっき言っておりますけど、もうちょっとのところでまだできていないそうです」

「ははあ」

脇村さんの語調には《そらおいでなすった》という感じがにじみでいた。

「とにかく、それでは只今からお伺いいたしますと先生にお伝え下さい」

「おいでになってもできていないと思いますよ」

「かまいません。どっちみちできてないなら行きます」

脇村さんは、わかったようなことを言った。彼は電話を比較的近くからかけてきたと見え、三十分後にはもう玄関の覗き窓の外に、魚眼レンズでふくらんだ人間のような恰好で立っていた。

垂水朝一郎は和服など着たことのない作家であった。いや垂水夫人が寝つくようになってから、垂水家の生活は、簡素を第一とするようになったので、彼の衣服はすべて、垂水が自分でデパートで買